

# 柳井金魚ちようちんの歴史

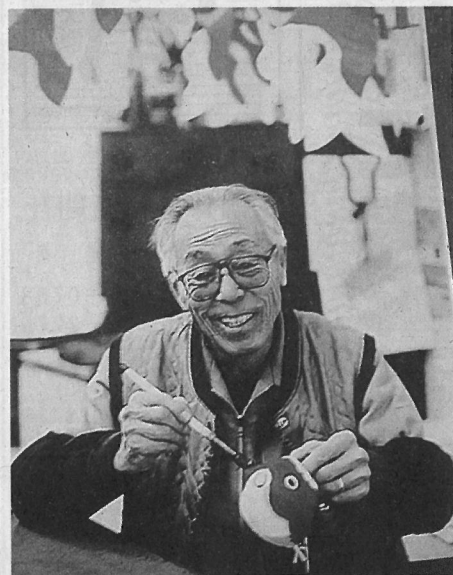
④

## 柳井市社会教育指導員 松島幸夫

【5】柳井の金魚ちようちんを誕生させ、継承してきた人々

「金魚ちようちん」は、竹ひごを組み合わせて骨格とし、和紙を貼り、蠟をひき、赤の染料で胴部を着色し、黒の染料で眼を入れる簡素な玩具であるから、高等技術を必要とせず、多くの子供たちが所持したものである。

「さかい屋」の林三郎であることから「サカイリン」と称した。「金魚ちようちん」を製作する際の主な材料は、竹と紙と染料と蠟である。熊谷宅には「ちようちん」の材料である染料と蠟が手元にあつたことから、「金魚ちようちん」を作ってみようと思いついたのである。蠟を必要とする理由は、蠟を赤地と白地の境にあらはじめ塗っておき、境目を際立たせるためである。



熊谷林三郎の息子である定治氏は、苗字を宮本姓に替え、亀岡町で「サカイリン」の看板業を営んだ。定治氏は熊谷家で育つ折、「金魚ちようちん」の作り方を親の林三郎から直伝されていた。林三郎の死後、宮本定治氏は看板作りの家業に精を出し、暇を見つけては「金魚ちようちん」作りに励んだ。さらに、宮本定治氏の息子である美佐男氏も看板業を継いで、「金魚ちようちん

を作った。宮本美佐男の孫は、福田姓を名乗って小間物屋を営んだが、「金魚ちようちん」は作らなかつたと言われている。

次に技を継承したのは、本町通りで洗い張り業を営んでいた長和定二氏である。長和家は定二氏の親が一家を引き連れて防府の三田尻から柳井へ移住し、染物屋を開業した。初め定二氏は染物屋を手伝っていたが、宮本美佐男氏の看板店に就職して、絵描き修業をしている。その時に美佐男氏から「金魚ちようちん」の作り方を教わった。長和定二氏は後に本町通りから金屋町に店を

移し、そこで本業を営む傍ら「金魚ちようちん」を作って、夏祭りの夜店で販売をした。なかなかの好評で多く売れたが、第二次世界大戦中に余儀なく販売を中止した。戦後、再び売り出したものの、さっぱり売れなかつた。

戦後の窮乏によって子供たちが「金魚ちようちん」を手にしなくなり、継承が途絶えた状況にあって、大島郡大島町小松在住の上領芳宏氏が優雅な「柳井金魚ちようちん」に魅せられ、復活に乗り出した。長和定二氏が作った「金魚ちようちん」を分解し観察して、忠実に再現をした。長和

また、周防大島町西屋代在住の中原勲氏も「金魚ちようちん」に魅せられた一人で、長和定二氏の「金魚ちようちん」を手本にして、再現をしている。その作品は現在、柳井市しらかべ学遊館に展示してある。

また、星出(千出?)氏も再現をしている。昭和53年頃から、伊保庄公民館で夏休み中の小学生向けに、星出氏が「金魚ちようちん」の作製教室を開催した。その作製教室には、途中から小学校の教員であった河村信男氏が参加し、作り方を習得した。信男氏は子供たちへの「金魚ちようちん」の普及活動をする傍ら、効率的な製作をするに適した形に進化をさせた。形と色彩の変化は、「柳井の金魚ちようちん」を一層愛嬌に満ちたものにしていく。時あたかも、「町づくり村づくり」の機運が盛り上がった時期で、全国各地で行われる地域情報発信イベントに派遣され「柳井金魚ちようちん」の制作実演を披露して、PRに努めた。柳井のお土産として日本全国に広く認識される契機になった。河村氏の亡き後、残された家族が「河村信男工房」を設立して、氏の業績を伝えている。

この日、浅から「素晴らし残された。ひ品センターで販売され、地に協力いただきことに感謝した。たえられたは「このコン」は初めて出品に一番を狙った。今回は自信が、金賞も喜

飼育した牛が配合飼料和牛去勢の部で金賞を受賞。営する岩国フ村田頼泰社長生牧場の佐々長(53)が16日を訪れ、浅本に受賞報告をこの研究会(スト)は、ジエ九州くみあい催し、くみあい利用する農家1月28日に開県と九州5県の部に61頭、18頭の合計79され、平生牧した牛が見事部で唯一の金

「写真上は原田泰治の版画・製作風景。下は河村信男氏の製作風景」



皇郷 北陸 井生 布 大麻 柳伊 柳平 田 施野球、麻郷ベアース(以せは別表の通り)

えられる。(柳井予選の組み合わせは別表の通り)